

第 2 回 (上)

『名門大学入試問題で知る「反」日本史』

須藤公博、講談社、2013年

第2回は、駿台予備学校の日本史講師、須藤公博さんの『名門大学入試問題で知る「反」日本史』を取り上げます。

須藤先生は、駿台予備学校で東大・早慶クラスなど最上位クラスを担当されたり、文化放送、フジテレビ、テレビ朝日などに出演されたりと、幅広く活躍されています。

著書には、『愛と欲望の日本史』(祥伝社黄金文庫)、『まるわかり日本史』(永岡書店)、『家系図から読みとる日本史』(駿台曜曜社)、『日本史の意外なウラ事情』(PHP文庫)などがあります。

ところで、この本のタイトル『「反」日本史』(「有名大学入試問題で知る」というサブタイトルまでついていますが)、どういう意味かわかりますか？

以下は著者のコメントです。

第一の狙い。

「えっ、私たちが習ったのと、違うじゃない!」「大学の入試って、そんな新しいことまで出るの?」 世の中のおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんから、こうした声が聞きたいんです。「聖徳太子はいなかった」「宮崎アニメを見るのも受験勉強?」「慶安の御触書はなかった」・・・みんな、おとうさん・おかあさんの常識と反対のことばかり! だから『「反」日本史』なんです。

第二の狙い。

「大学入試の問題」を通じて「歴史」を語る。「大学入試の問題」をして「歴史」を語らしめよ。・・・「大学入試の問題」をダシに「歴史」の本を書く。

という理由で、この本を書かれています。1つめの狙いを読むと、なんか面白くなってきます。須藤先生はかなりお茶目な方みたいです。

涙が出てくる、天正遣欧使節

さて、『名門大学入試問題で知る「反」日本史』の内容なんですが、「有名大学入試問題で知る」とありますので、しかも第2の狙いに書いてありますように、日本史の大学入試問題がいっぱい出てきます。東京大学に限定されません。私学も出てきます。

ただ、私が今回紹介するのは、入試問題ではなく、須藤先生が本の中で書かれているあることについて、まとめたいのです。

「あること」とは何か？

それは、「天正遣欧使節」についてなんです。お恥ずかしい限りですが、かなり知らないことが書かれてあって、「えっ、そうやったんや！」と勉強になったことが多かったんです。

その所は、生徒に授業で話しましたが、「ここだけの話」にしておくのは、あまりにもったいないので、紹介させていただきます。

選ばれた4人の少年たち

あなたは、1582（天正10）年、九州のキリシタン大名がローマ教皇のもとへ派遣した4人の少年たちのことを知っていますよね。4人の少年使節の名前・・・

それは、伊東マンショ（1569頃～1612?）、千々石ミゲル（1569頃～?）、中浦ジュリアン（1569頃～1633?）、原マルチノ（1568頃～1629?）でしたね。

4人とも覚えていなくても、伊東マンショは有名ですね。彼らの年齢は13～14歳で、今の日本で言うと中学生です。

彼らは、なぜヨーロッパに行くことになったのでしょうか？

ナポリ王国キエティ出身のイエズス会巡察師であるアレッサンドロ・ヴァリニャーノ（1539～1606）が帰国する時に、大友氏・有馬氏・大村氏に遣欧使節を勧めたのです。

なぜでしょうか？

ヴァリニャーノの目的の1つは、4人の少年と一緒に連れ帰ることにより、少年たちに直接ヨーロッパのキリスト教世界を見せ、そのスポークスマンとしたかったんですね。そのことで、日本人のヨーロッパに対する認識を高めたいと考えたんです。

目的の2つめは、イエズス会が育てた少年たちをヨーロッパに紹介することで、日本への布教活動の成果をアピールし、ローマ教皇やポルトガル国王の援助を得たいということでした。

では、この4人はどうやって選ばれたのでしょうか？

彼らはイエズス会の司祭・修道士を育成するための神学校（初等教育機関）にあたるセミナリオで学んでいた学生から選ばれました。伊東マンショ（正使）は大友宗麟の名代であり、千々石ミゲル（正使）は大村純忠の名代でした。さらに中浦ジュリアン（副使）と原マルチノ（副使）の二人が選ばれ、合計4人となりました。

さて、少年4人以外にも天正遣欧使節に随行したメンバーがいます。

日本人は少年4人以外に3人もいたんです。3人の日本人とは、使節の教育係ジョルジュ・ロヨラ修道士、印刷技術習得要員のコンスタンチノ・ドラードとアグスチーノです。日本人ですが洗礼名なので外国人に見えます。そして、通訳でイエズス会員のディオゴ・メスキータ神父、オリヴィエーロ修道士がいました。

ただ、言い出しっぺのヴァリニャーノ神父は職務によってゴアにとどまることになり、彼に代わって一行をローマに届けたヌーノ・ロドリゲス神父も随行することになりました。

少年たちが出会った人々は？

長崎港を出発して、長崎港→マカオ→マラッカ→ゴアと巡り、**リスボン**に到着したのは1584年8月10日でした。出発してからほぼ2年半後のことです。

彼らは、リスボン近郊のシントラのアルベルト・アウストリア枢機卿という人物（この人はフェリペ2世の妹マリアと神聖ローマ皇帝マクシミリアン2世の子だそうです）の王宮に招かれます。

マンショやミゲルはポルトガルのエヴォラ大司教座教会のパイプオルガンを弾いて大司教をうならせたと言います（ちなみに、この町エヴォラはユネスコの世界遺産「エヴォラ歴史地区」として登録されています）。この時のパイプオルガンは今もあるそうです。さらに、ヴィラ・ヴィソザ宮殿ではヴィオラやクラヴォなどの西洋楽器を操りその腕を披露しました。セミナリオで学んだ音楽教育の賜なんですね。

次に訪れたスペインの首都**マドリッド**では、スペイン国王とポルトガル国王を兼ねていた「世界の帝王」「南蛮の大王」に歓待を受けることになりました。

それは誰でしょうか？

そうですね。**フェリペ2世**でしたね。フェリペ2世と言えば、「**太陽の沈まない帝国**」を築いたスペイン黄金期の王でしたね。また、東南アジアのフィリピン、その国名はフェリペ2世にちなんでいるというのも有名ですね。

さて、フェリペ2世は使節に謁見する前、サン・ヘロニモ教会での皇太子の宣誓式で、王の一族や聖職者、諸侯らとともに、使節を列席者に加える配慮を見せます。これは破格の扱いです。フェリペ2世は和服正装の姿、着物に袴、足袋に草履、帽子、と言う使節の姿に興味津々だったようです。伊東マンショが脱いだ草履を自ら手にとって眺めたそうです。そして彼らは完成したばかりのエスコリアル宮殿にも、フェリペ2世の賓客として3日間宿泊しています。

さらに、翌年**フィレンツェ**に到着します。

ここでは、トスカーナの公爵夫人ピアンカ王妃の招待で舞踏会に招かれます。舞踏会の招待主ピアンカ王妃は、美貌で名を馳せた人物だそうで、彼女はまずはじめに伊東マンシ

ヨを踊りの相手に指名し、次にミゲル、最後にジュリアンとめぐります。ジュリアンはこの美しい王妃に慌ててしまって、自分の次の踊りに動けそうもないお年寄りの女性を指名して、一同が大笑いをしたというエピソードが残っています。



※上記の地図は、長崎県の『大村観光ナビ』より許可を得て掲載させてもらっています。